

症例検討会

症例3

平成27年度細胞診従事者講習会

大分市医師会立アルメイダ病院

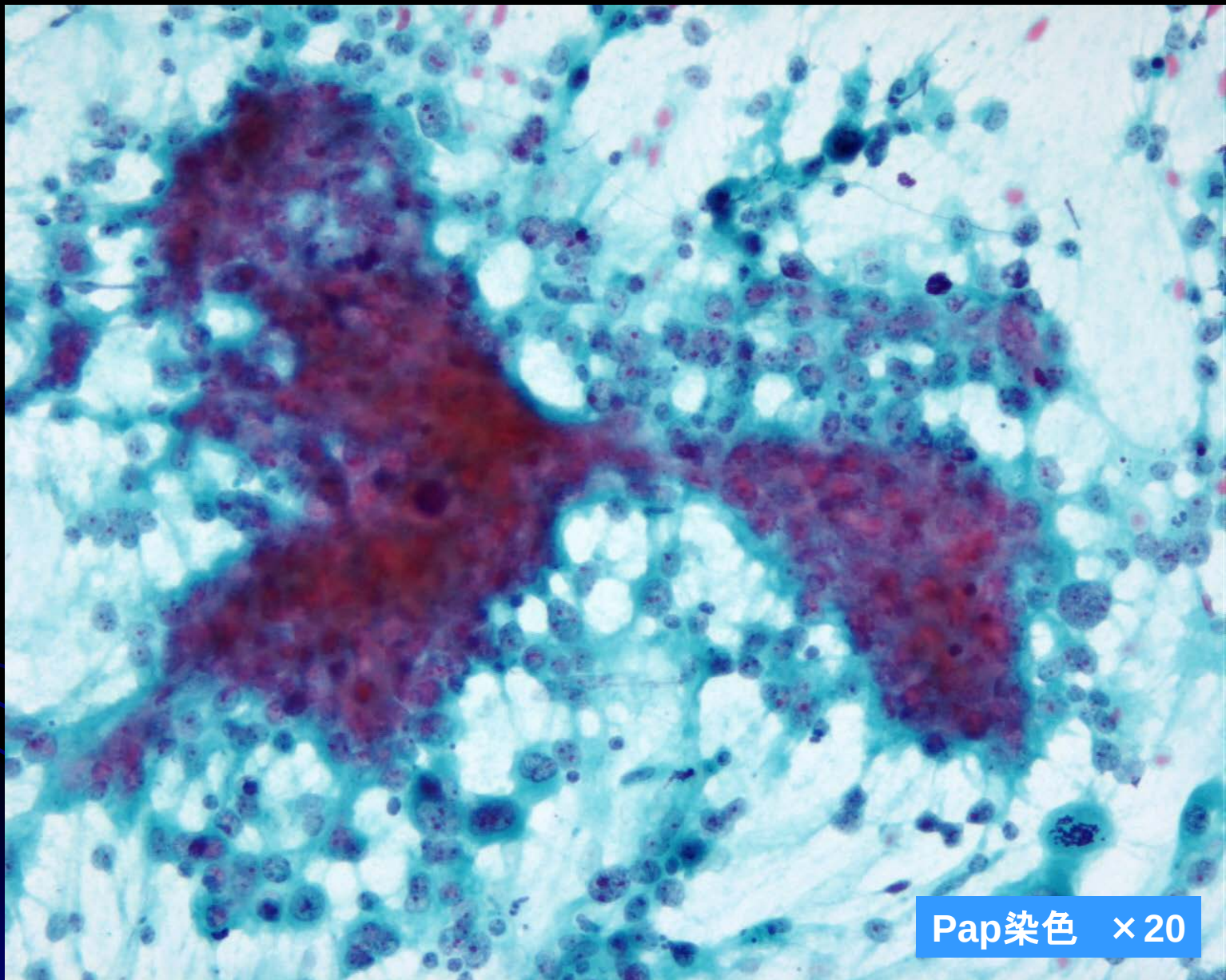
木本智也

症例3

年齢・性別：50代 女性

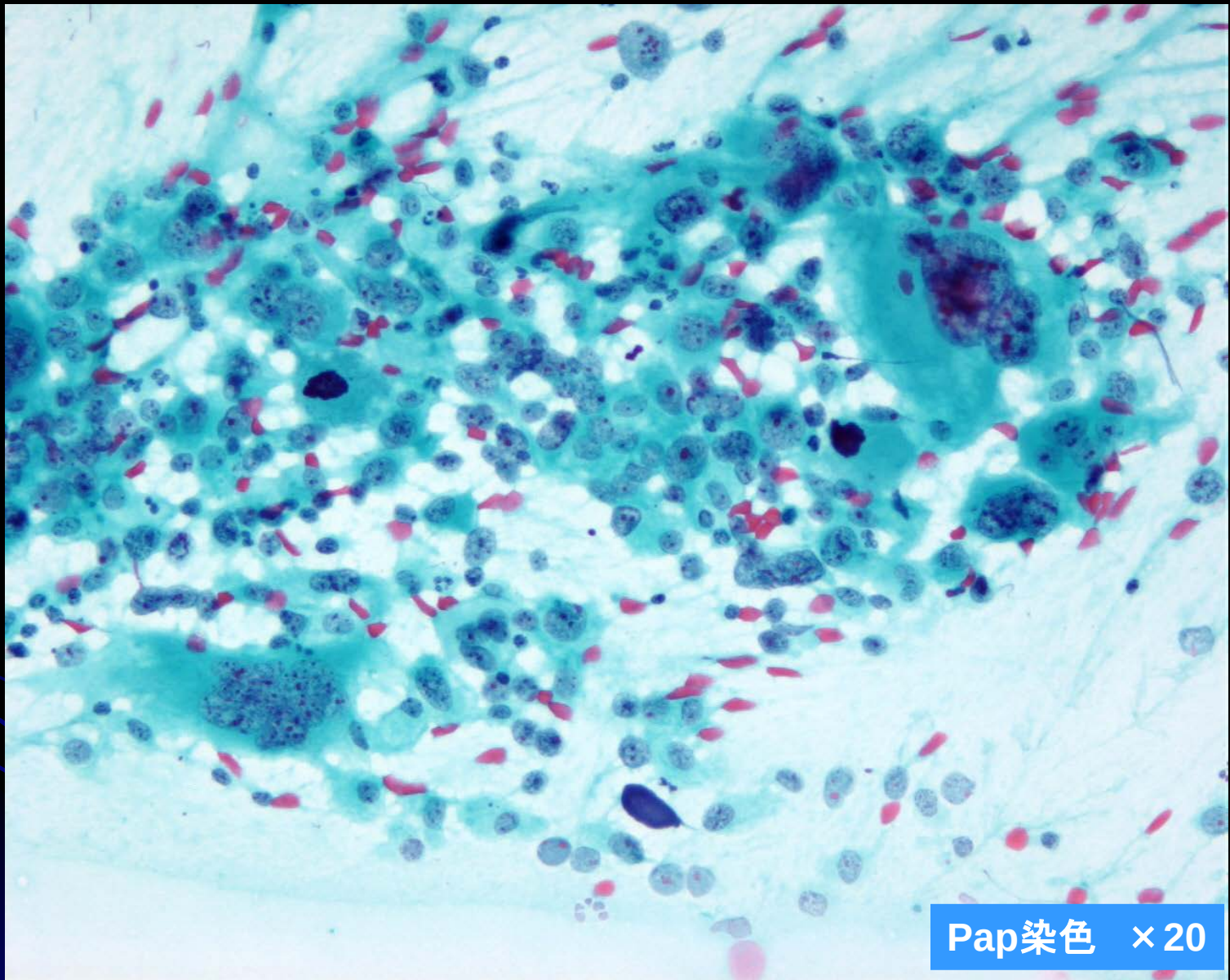
材料：迅速時乳腺腫瘍穿刺材料

臨床所見：右乳腺C領域に1.5cmのmassを認める。

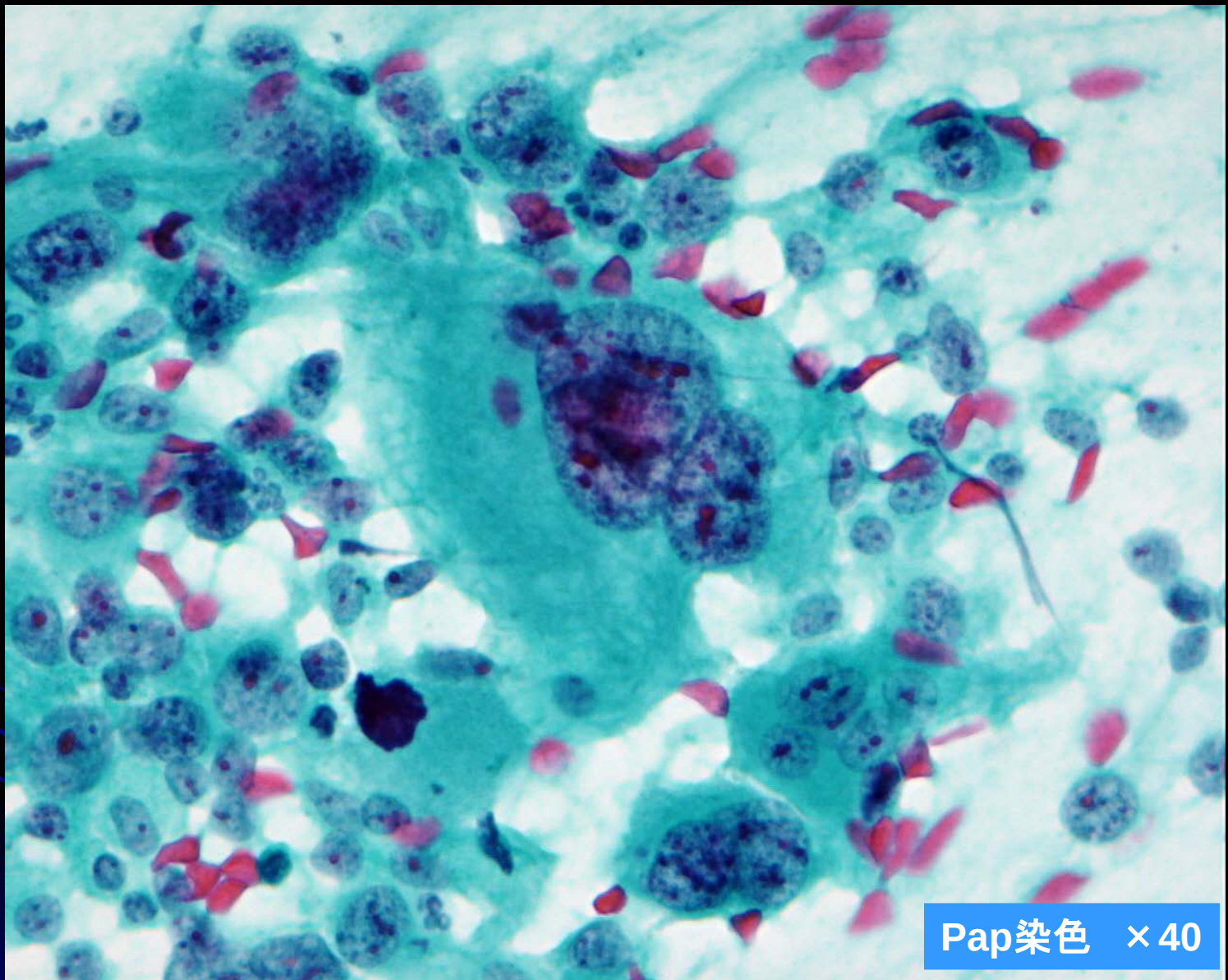


Pap染色 ×20

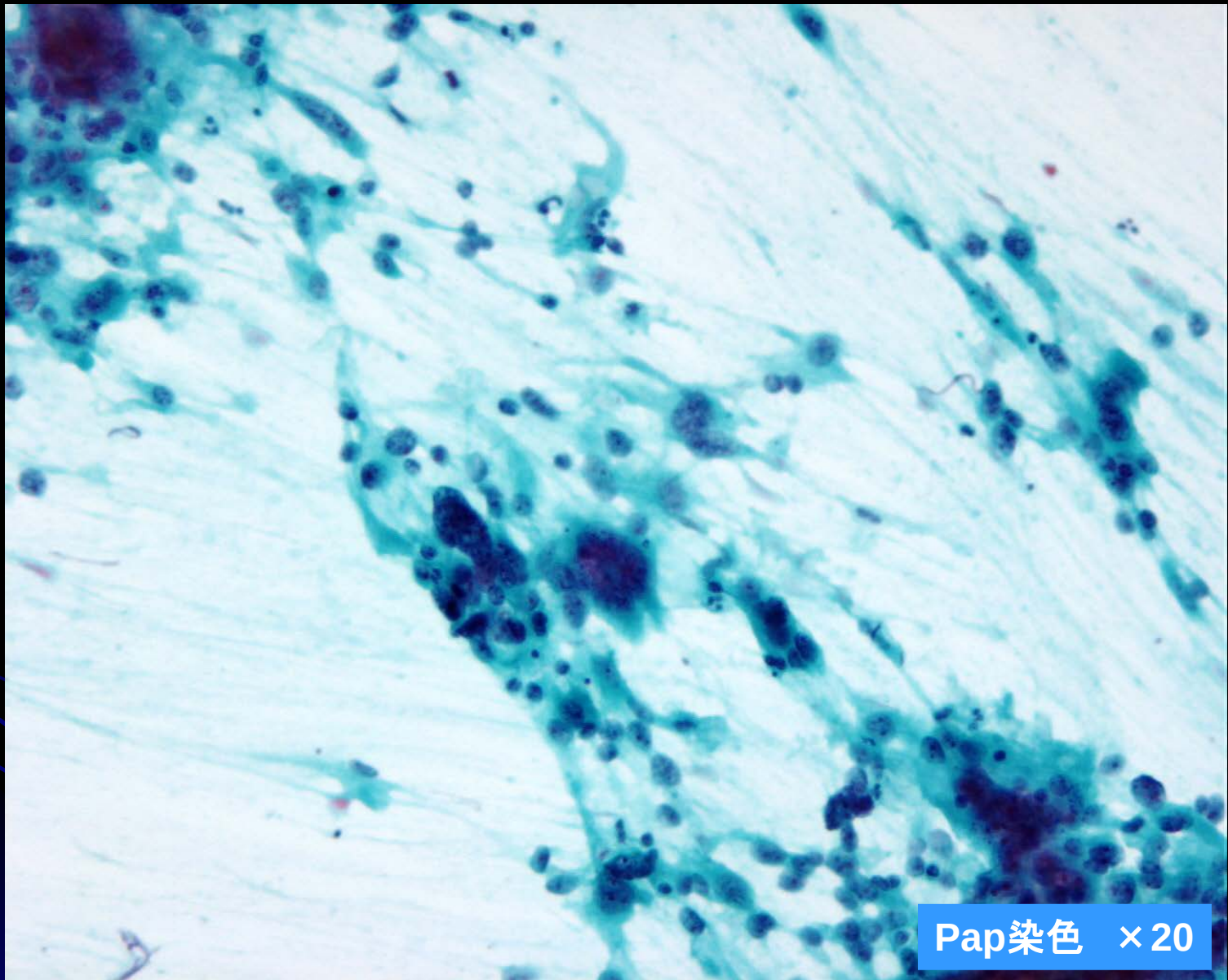
腺空様構造をもつシート状集塊、辺縁にほつれを認める。



細胞境界不明瞭な細胞が粗な結合性で出現。複数の多核巨細胞も認める。



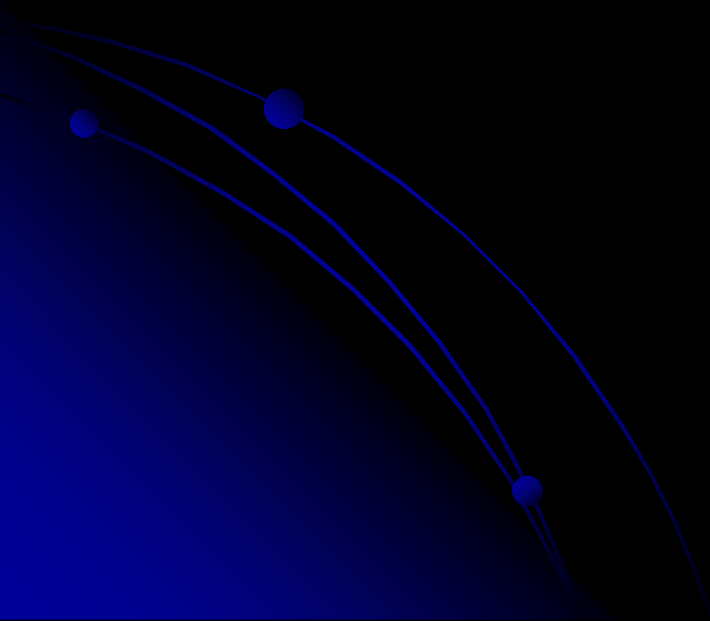
核は類円形で大小不同が目立ち、核小体も単個～複数認める。

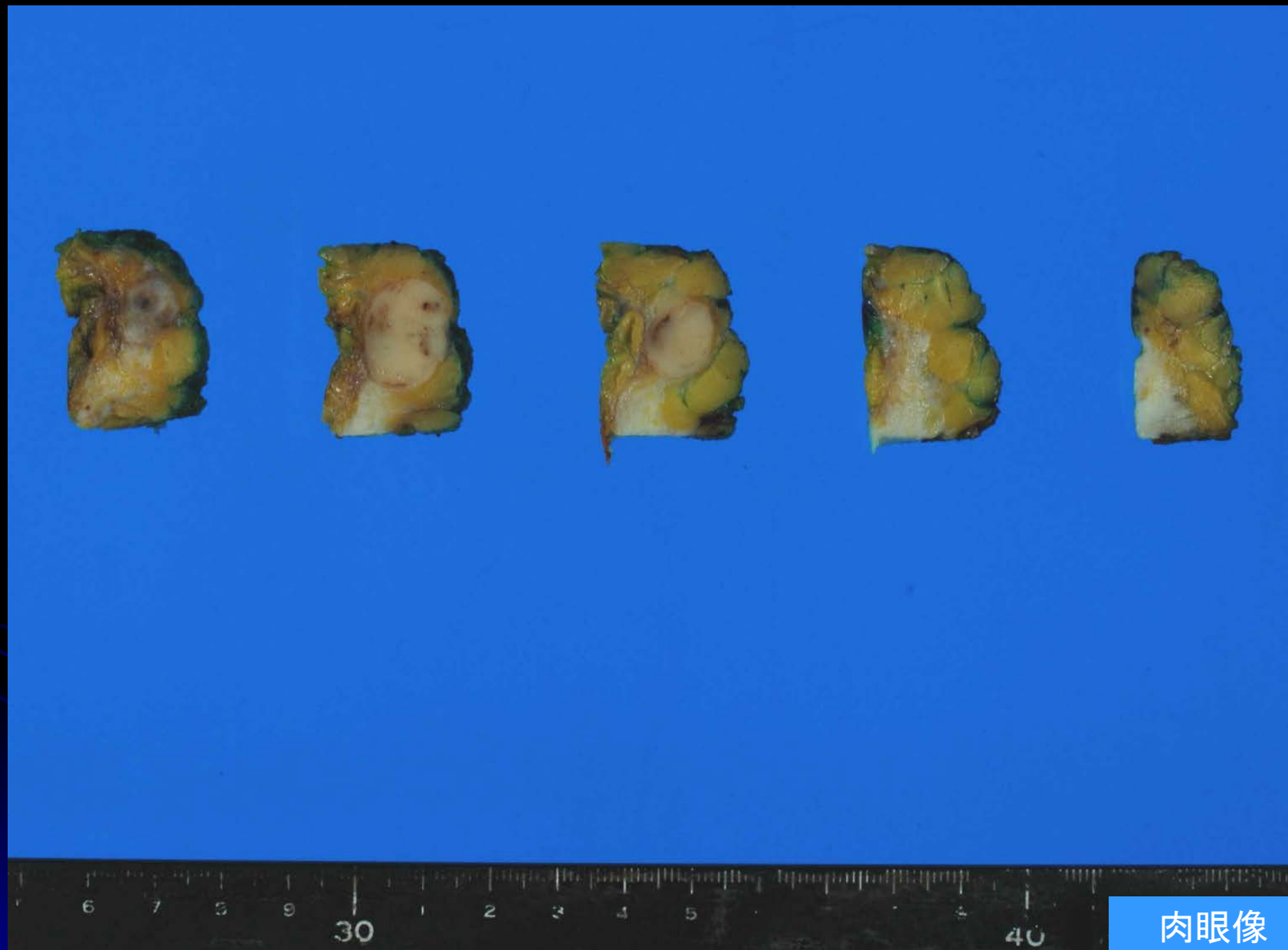


肉腫成分を思わせる紡錘形の細胞を孤在性に少数認める。

推定 紡錘細胞癌

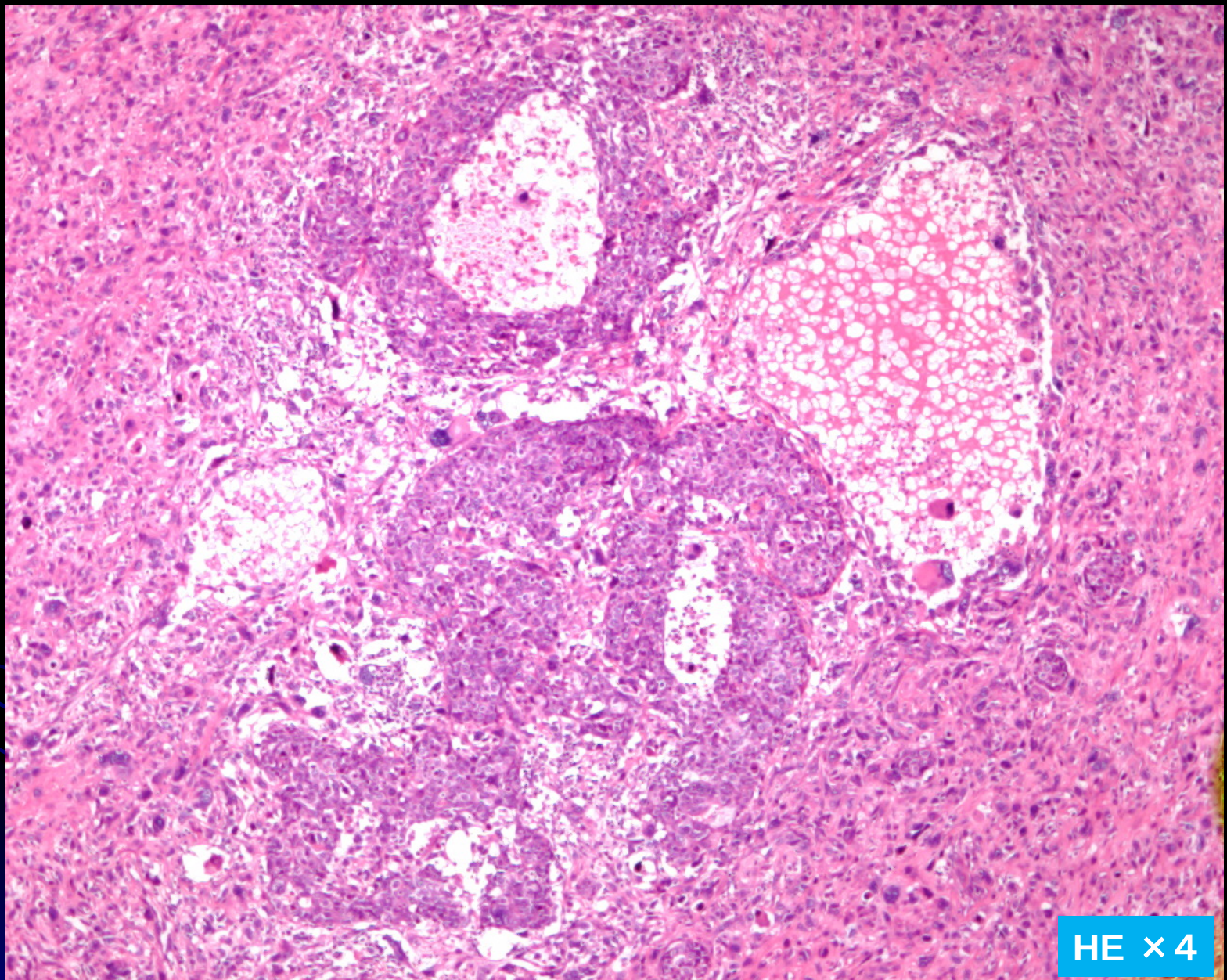
Spindle cell carcinoma





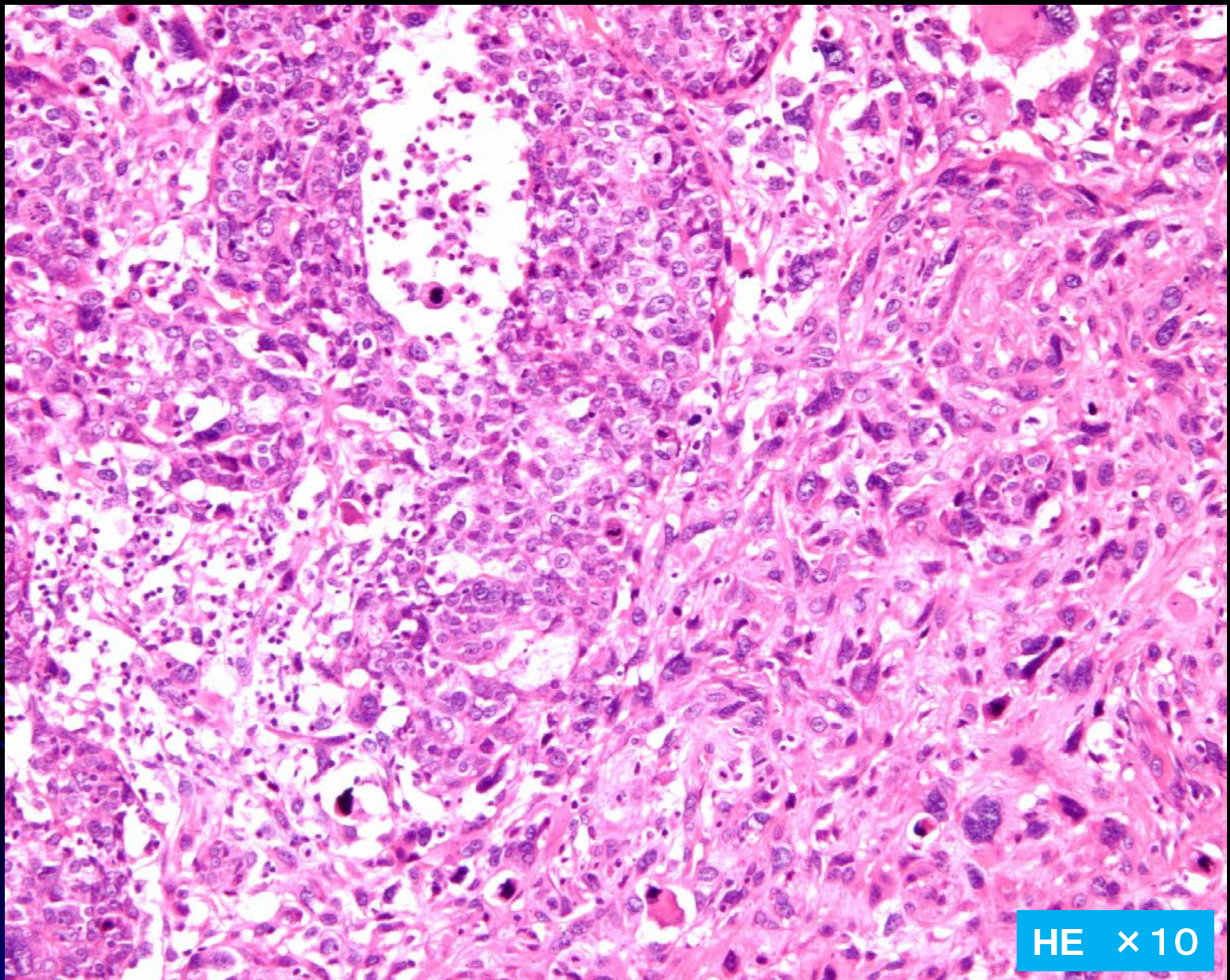
肉眼像

腫瘍は白色で境界明瞭。

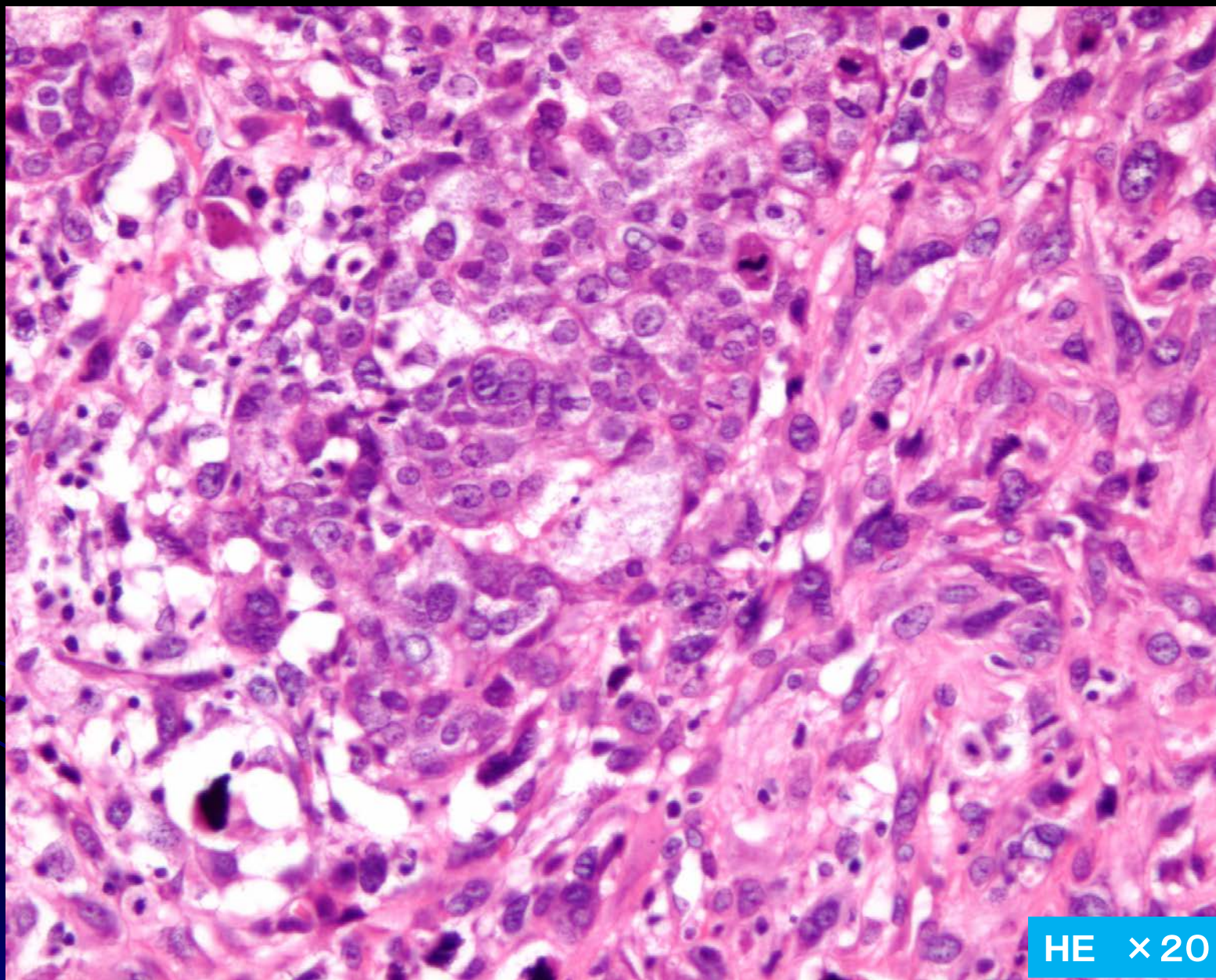


HE × 4

壊死細胞を含んだ浸潤性乳管癌を囲むように肉腫様細胞が周囲を取り囲んでいる

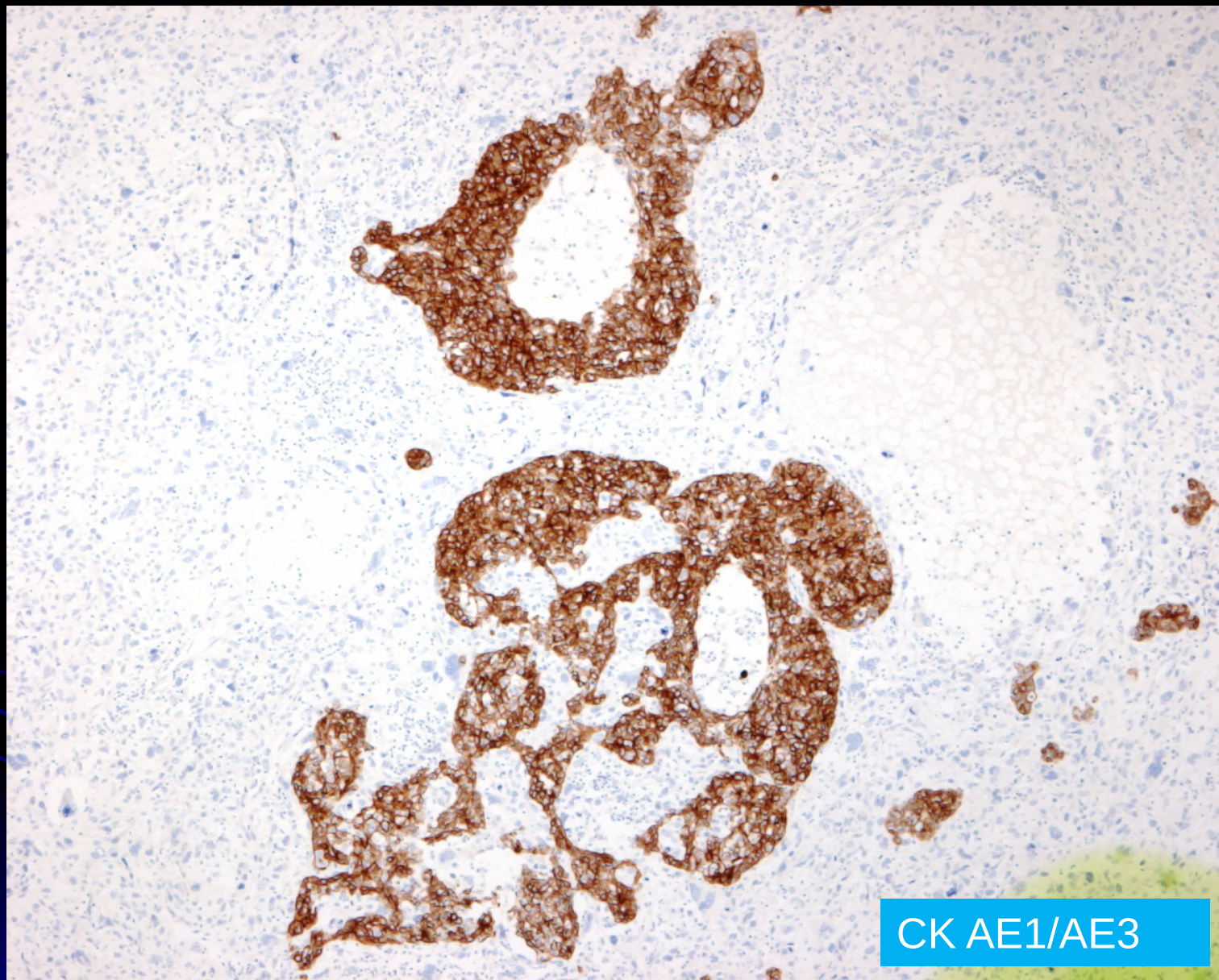


浸潤性乳管癌と肉腫様細胞の境界部分の一部不明瞭。



HE × 20

肉腫様細胞に混じり紡錘形の細胞も散見される。



CK AE1/AE3

浸潤性乳管癌部分には陽性所見を認めたが、残念ながら肉腫様成分には陽性所見は認められなかった。

紡錘細胞癌とは

- 乳癌取扱い規約(第17版 2012)では組織学的亜分類の特殊型に分類される。
- WHO分類(2012)では紡錘細胞癌は癌種が肉腫様変化を来した“いわゆる癌肉腫”である。
- 発生頻度は全乳癌の0.1～0.2%以下
- 発症年齢、臨床症状は通常乳癌と同様とされてるが、通常型浸潤性乳癌と比較して乳癌関連のホルモン受容体やHER2の発言が全て陰性(triple-negative)であることが多く予後不良とする報告が多い。
- 上皮性成分に乏しい腫瘍では、癌よりも肉腫に近い臨床経過を示すことが示唆されている。

細胞像

- 背景は壊死性や粘液性。
- 異型の目立つ紡錘形細胞が集塊状や散在性に出現する。
- 核は楕円形や不整形でクロマチンは増量、核腫大・増加もみられる。
- 多核や奇形核を有する大型異型細胞が混在することがある。
- 紡錘形細胞の細胞境界は不明瞭であるが、孤在性あるいは明らかな上皮性結合を有するシート状の上皮性異型細胞を伴うことがある。
- 紡錘形肉腫様細胞か上皮性細胞かに明確に分類できない異型細胞は、病理組織像での移行像に相当する部分と想定される。
- 上皮性細胞が含まれていない場合、他の癌肉腫との鑑別は困難。(※繰り返し細胞診を行うことで正診率はあがる。)

病理組織像

- 肉眼所見は浸潤性、圧排性・膨張性など様々。
- 束状や花むしろ状、無秩序な配列などを示す。
- 間質は疎性結合織や膠原繊維を主体とするもの、粘液様基質を伴うなど様々である。
- 高異型度の腫瘍では、腫瘍内に既存の乳管や小葉は認められない傾向にある。
- 非浸潤癌成分や通常型浸潤性乳管癌、浸潤性小葉癌などの明らかな癌と混在し、移行像が確認可能な症例から、主に紡錘形・肉腫様細胞から構成され上皮成分の同定が困難な症例まで腫瘍を占める上皮成分の比率は多様である。
- 紡錘形細胞の上皮様性質の推定にはCKなどの免疫組織化学が有用である。(※抗体の感度は症例によって異なるため広範囲、高分子CK抗体を複数併用することが望ましい。)

鑑別が必要となる症例

- 良性
繊維腺腫、良性葉状腫瘍、過誤腫、腺筋上皮腫など
- 悪性
間質肉腫、悪性葉状腫瘍、血管肉腫、癌肉腫など

まとめ

- 今回の症例は術中迅速病理診断と迅速時吸引穿刺材料との組み合わせにより精度の高い検査が可能になった。さらに上皮性癌細胞と紡錘形細胞に移行像が認められたため紡錘細胞癌を推定できた。
- 時に紡錘形細胞のみからなると思われる場合も存在するが、その場合でも上皮性癌細胞から紡錘形細胞への移行部が存在することがあり、丹念に検索する必要がある。
- 紡錘形細胞は上皮様性格を持ち一般的にCK陽性だが、まれにCK陰性のことがあるため免疫染色の評価には十分に注意する必要がある。
- 事前に紡錘細胞癌を見つけることで術前化学療法後の根治手術が可能になるため細胞診の意義は高い。